釣れ釣れなるままに

２０１４年思い出の釣行記 PART.　１

ウサギ追いし

砂川遊水池のワカサギ

鹿島釣狂

三日月湖の復活

砂川遊水池のワカサギの放流が今年は中止になった。原因はよく分からないのだが、オアシスパーク高度利用研究会が毎年のように実施していた放流事業を今年はお休みしたらしい。この研究会はシャケの放流事業も手がけていた。

炭鉱が華やかし頃、石狩川に注ぐ小河川は、洗炭場で炭塵が混ざった黒々とした流れだった。それが時代の趨勢と共に廃坑となり、狭い河川敷に寄り添うように縫っていた炭住も廃墟となって清流が蘇ってきた。人口孵化事業に成功していた千歳川を除いてはシャケの遡上が見られなくなって久しかったが、河川環境への関心は高まりを見せ、魚道の整備や河畔林の植栽などとともに、市民の手でサケの稚魚放流が続けられてきた。砂川市でも市内の保育園や小・中学校、各事業所などで養育・観察し、体長４～５㎝に育った稚魚を、数年後の回帰を願って放流壮行会を実施していたのだ。私が砂川市勤務の時には、このオアシスパークに注ぐパンケ歌志内川の川原で実施されたシャケの壮行会に子どもたちを連れて参加したことがあった。

砂川遊水池は、かつては大雨が降るたびに氾濫を繰り返してきた石狩川の洪水を防ぐため、川のショートカット工事によって生まれた蛇行跡を活用して昭和６２年から建設が始まり、平成７年に完成している。大雨などで石狩川が氾濫する恐れが生じると、洪水は上流側の越流堤から遊水地へと流れこむ。これにより、岩見沢市や江別市などの下流に流れる水の量を調節することが出来るため、氾濫の危険を少なくすることができるというのだ。

三日月湖の復活である。川の蛇行こそが洪水を防ぐと認めた事業なのだ。これまでは、川を真っ直ぐにして蛇篭やコンクリートブロックで川縁を浸食されないようにと強化してしまっていた。洪水が起きないようにと堤防も嵩上げしてきた。そして、その周辺の三日月湖や沼地を田畑に開墾し続けてきたのである。その結果、川原が狭くなり、大雨が降っ

たときに水の逃げ場がないような状態にしてきたのだ。私が岩見沢の幌向に赴任した時には、洪水による濁流が住宅の天井にまで届こうといわんばかりに、壁にその紋様を刻み付けていた。

真っ直ぐにした石狩川を洪水の時だけ元に戻す試み。石狩川の際まで田圃が広がっている。周辺にはヘラブナ釣りで有名な袋地沼（右上）もある。

ヤマメ釣りしかの川

私が子どものころに釣りをした沼地も、現在は綺麗な田圃となって稲穂を揺らしている。実は、私の親父もその開墾事業の一躍を担っていたらしく、払い下げられた沼地を馬を使って大木の根を取り除き、冬には馬橇で土を運び入れて畑にしてしまったのである。私の実家からは離れているので、飛び地となっているのだが、少年のころはこの畑の草取りに行かされたものである。小豆などを植えていて、一時、小豆の値が米を大きく上回ることがあり、親父が非常に喜んでいたのを思い出す。米１俵の値段が４０００円の頃だったが、１万円以上の値を付けたのである。

中学生の頃、お袋と一緒にその開墾されたばかりの畑の雑草取りをしていたときに、延々と続く作業に、「よくこんな事を毎日毎日続けていられるものだね」と呟いたことがある。お袋は「ワスは辛いことなんかない。何も考える必要もなく、この作業に没頭している内に日が暮れて一日を終えることができる。こんないいことがあるかよ。ワスは畑仕事、野良仕事が好きだねぇ。雑草が無くなり小豆畑が綺麗になっていく様を見るのが嬉しいんだよ。一日に自分がこれだけの仕事をしたというのが目に見えることがいいんだよ」という

ようなことを言っていたのが思い出される。

その畑の近くに石狩川の支流である尾白利加川、さらにその支流である福井谷川という小河川が流れていた。その川は山女魚の住む川で、私がソワソワし出したのを見透かしたように、お袋から夕方までのノルマを課せられた。ここまで取り終えれば釣りをしてよいというのだ。暗に２時間ばかりの余裕をくれたのだ。その途端、私の鍬を持つ手が忙しく動き出したのは言うまでもない。ノルマを達成して川に向かったときは、お袋は何も言わずに釣り姿を見つめてくれていたように思う。柳の木の陰から川の淵にミミズを流すと、２０㎝ほどの山女魚が次から次へと掛かった。淡く桜色に染めた白銀の腹に、朱点と薄い紅色の横線が１本、背から腹にかけて淡青色の楕円斑紋が浮き出た、まさに渓流の妖精といった姿に見とれたものだ。

ヤマメ

釣りから戻ったときには、お袋は私の取り損ねた雑草をとっていた。畑からの帰り道は、香ばしく焼きあがった山女魚とそれを頬張る家族の姿、なによりお袋の姿を思い浮かべて嬉しい気持ちでいっぱいになった。田圃の用水路にも山女魚が入り込んできていた時代だった。５０年以上も経った今では山女魚の姿を見ることはできない。あの山女魚たちはどこに消えてしまったのだろう。

その畑は、国の整備事業で補助金をもらい、ブルドーザーで平らにして美田になった。秋の農繁期に病弱な親父が床に臥せっている頃、お袋は男勝りにも稲架木（はさぎ）にする丸太ん棒

を担いで縄で括った。貧乏学生だった私にも応援依頼の葉書がよこされ、友達に授業の代返を頼んで１ヵ月ほどを実家に帰ったことがある。夕飯時にお袋に「お前、なんで正座してんのよ」と聞かれてビクッとしたことがある。実は力仕事ばかりで痔を患ってしまっていたのだ。いぼ痔だった。指で押しても引っ込まないので、胡坐をかいて座ってしまうと痛いのだ。愚痴の一つも言わずに忙しくしているお袋が不憫で、「痔で痛い」と言うこともできずにいたのだ。次の日は丁度雨降りで一日何もせず横になっていると随分とよくなったが、お袋の手前、まだ痛みの残るのを我慢して「治った」と胡坐にしたのを思い出す。

冬を迎える前の農繁期だったが、祖母が煮染めたウグイやフナの甘露煮が美味い時期だった。このウグイやフナも春のうちに私が釣り上げたものを、薪ストーブの上の天井から吊り下げられて乾かされていたものだ。

稲架木（はさぎ）担ぎは親父の仕事のはずだったが、お袋がすることになった

放流事業の恩恵に浴す

ワカサギの放流事業が中止になったのが原因なのかどうかはわからないが、釣り仲間が例年の様に行ってみたが全然釣れないと言うことだ。昨年一緒した旭川市在住の「討ち入りの会」のメンバーも２人で３０匹だったということだ。名手の堀部安兵衛でさえさっぱりだというのだ。

一日に千匹を目標にする釣りはない。ワカサギを千匹釣ったことはないのだがそれに迫る釣果はあったのだ。彼らは、たまたま日和が悪かっただけで工夫次第では釣れるので

はないかという思いで遊水池に出かけることにした。息子を誘うと簡単に乗った。

日の出前に出発の予定が、何やかにやらと準備に手間取り、１０時に竿を下す。しかし、釣れない。どの様にしても釣れない。初心者の息子なら納得できるのだが、かなりベテランになってきた私でさえポツン・・・、ポツン・・・とかかる程度なのだ。そのポツンで偉そうに息子に手解きをする。

「この釣りはウキフカセ釣りといって錘を非常に軽くして、ワカサギが違和感なくエサを銜え込むことが出来るようにしたものだ。そして、ようやく浮いているか浮いていないかの瀬戸際にある３連に繋いだ小ウキでアタリを取るのだ。一番下のウキがファッ、ファッっと微かに動くのはエサを口に入れてすぐに吐き出しているアタリだ。ウキが揺れるのはエサを吐き出したころで、それから合わせてももう遅い。口に入れた時に合わせるのは至難の業だ。見釣りならできるかもしれない。ワカサギが寄ってきてエサが見えなくなるときに合わせると百発百中だ。しかし、その口に吸いこむ姿が見えない状態で合わせるのは出来る事ではない。実際には、下のウキがスーッと横に動いたときだ。これはワカサギがエサを咥えたまま横に走った状況とみてよいだろう。その時に合わせるのだ。」

そのコツを幾分つかんだ息子にもポツン・・・・、ポツン・・・・・と釣れるようにはなった。しかし、千匹を目標にする釣りでこのまどろっこしさはいただけない。正午になる前には片付けた。何とか２人合わせて５８匹の釣果だった。

最近では放流事業が自然体系を壊すと物議を呼んでいる。アメリカでは母川回帰のシャケ、マスでさえ放流事業を縮小していると聞く。環境教育として東京の都心を流れる多摩川に児童がシャケを放流するのにもクレームがつく時代である。私がブラックバスは認めたくないなと思うのも釣り人の趣向にあると思う。ニジマスはいいではないか。だがブラウンとなると・・・。ヘラブナでさえ養殖放流していると聞くぞ。高橋治の著書「波太郎放浪記」ではゴルフ場の増設と共に、タイやハマチの養殖、グレや黒鯛などのオキアミを使ったコマセ釣りをやり玉に挙げて非難している。

先日、ホテルの結婚式で中華風の餡がかかった白身魚のフライがでた。向かいに座った着飾った女性どもが美味いといってその魚の名前をボーイに尋ねた。それがナマズだったと分かると眉を歪めて口をへの字に曲げた。「１匹のナマズを池に放すと、その池の他の魚はいなくなる」と言われるナマズだ。外来魚ではない鮎やワカサギの養殖放流はよいが、害魚であるナマズは駄目だとなるのだろうか。

私は近年その放流したワカサギを狙って人工の池である遊水池にのこのこと馳せ参じているのだ。放流がされていないとなるとこの体たらくで、来年は放流事業を復活させてもらいたいものだと願ってしまっている。さてさて・・・。

帰りに美唄市茶志内にある「しらかば茶屋」に立ち寄った。降りしきる雪の中で、いつものようにタヌキの親子が出迎えてくれた。そのタヌキが被った編み笠が後ろにずれてしまい頭に雪が積もっていた。その頭の雪を払いのけて「この次は大漁を頼むぞ」と手を合わせたが、直立不動のままで「私たちには関係のない事でございます」といつまでもそっ

ぽを向いていた。

あまりの不調にしょげかえる

「しらかば茶屋」の玄関口で出迎える狸の親子

とり飯と塩ラーメンセットはいつもと変わらず絶品だった